仮名草子資料

『石山寺入相鐘』の解題と翻刻

小川武彦

『石山寺入相鐘』の解題

『石山寺入相鐘』は、巻末に「ときに延宝四年三月日市中借屋暗窓下にして記之　洛下冨尾似船」とあって、富尾似船の著である。

冨尾似船は、京都の人で、冨尾氏、通称弥一郎、名は重隆、別号芦月庵とも柳葉軒とも称したが、薙髪して似空軒二世、ついで似船と改ためた。貞門の似空軒荻田安静に師事して、寛文五年に俳諧撰集『蘆花集』を編んだ。

本書の成立は、巻末に記しているように、延宝四年であろう。この年は、『日次記事』に、

石山寺観音開帳　同新帝即位後多開帳又歴三十年亦然

と見えて、三十三年目ごとに行われたと言う、観音の開帳の年にあたる。その開帳の折の参詣記で、作者が京を出発し、途中「五十あまりの僧」と道づれとなり狂歌や俳句を交えながら大津に出て参詣するまでを描いた道中記である。

なお、雲英末雄氏編『貞門談林諸家句集』に似船の詳しい年譜がある。

書誌

表紙　改装紺色表紙
　　縦二六・五糎横一八糎。
題簽　欠。
冊数　二巻（観・音）合一冊
行数　一面十二行。
匡郭　縦二一・三糎、横一六・五糎。
内題　上巻「石山寺入相鐘　観」
　　下巻「石山寺いりあひの鐘　音」
柱題　柱刻の上部に次のようにある。
　　「入相上（下）」
丁附　柱題の下部に次のようにある。
　　上巻　一～二十一終。
　　下巻　一～二十一終。

刊　記　下巻終丁に次のようにある。
　二条通武村新兵衛　開板
印　記　「南畝文庫」、「帝国図書館蔵」の朱印がある。
備　考　『南畝文庫蔵書目録』に「巻三　裨史奇書　石山寺入相の鐘一巻」とある。すでに南畝所蔵に帰した時点で合冊であったことが知れる。

凡　例

一、底本は国立国会図書館蔵本を使用した。
一、原典に忠実であるを旨とした。よって、私意による句読訓点、あるいは清濁を施すことはしなかった。
一、仮名は総べて現行のものとした。
一、原典の行数は、一切考えなかった。が、丁数に関しては、一丁の表を（一オ）一丁の裏を（一ウ）とした。
一、挿絵は総べてこれを省略した。
一、原典の振仮名は総べて元の儘とした。

石山寺入相鐘　観

桐つぼのこずゑにすむ鳥の萬代をさえづり。御階の花にたはるゝ獣は。ざれても御庭のわか草をふまず。玉の沙に角をかたふく。蓋。聖王の人を愛し民をつかふに時をもてし。政をするに徳をもてし給ふおほん時をえたり。豈よろこばしからずや。抑江州石山寺は。によいりん観音霊應の地。良弁法師開基にして。数百歳の春秋を経たり。ときに延寳第四の春。三十三年の法会にめぐれりとて。三月の十日あまり。雲淡風軽き天。花に傍柳に随ふ鶯の聲。かすみをつたふあけぼのゝ山。仏殿にともしひのこる比。御戸のにしきひらかれたり。いでや京の楽助はいふにをよ（1オ）ばす。門田の面にすきつかふ農夫。くはゐひろはんとて手足どろまぶれなる早女の類ひ。すそ野の原に鎌をふる赤がしらのわつはすら。正月ぬのこの衣紋つくろひ。迷故三界の文かきたる。菅の笠の紐しめて腰のへうたんこゝろよく。落花の雪にあと付たり。あるはのりする尼。他の菜園に身をくるしめて。生涯をくるたつぎとせる。いもほり坊主のたぐひまで。ぼだい樹の百八を首にかけ。手には三十六へんをつまぐりうしろの油簟にはるの色をうつし。雪をのこせるこぶくめの袖。をのがさまゞ〳〵すゝんだり或は河辺の松にむれゐる鷺の。つばさはつかしきはだ着に。山鳥はいろをうしなひつべき。羽二重の両面。誰（1ウ）が家にかよし岡の風をそめいだせる。当世やうのたをやめ。よそに見てかへらん人にとよみし。花かづらをもどきぬべき。ちりめんの一むすび。ゆきかふ袖の追風。かほる大将にもねたまれ。兵部卿も手ををかせ給ふらんとおぼゆる程の人々。誰ゆかりにかあるらん。駕籠を春山の雲に飛ばし。つかれを湖上の浮木にやすむ。参詣の老少あふさきるさにみちもさりあへずと。きほひかゝつてかたる人あり。あらたにしんぬ。観音の霊験世にあまねくましますことを。予幼年のむかし。開帳の砌もかくやありつらんなれども。心を紙鳶の風にさそはれ。ばいまはしの席に勝負をいどみて。何のわいだめも侍ら（2オ）ざりき。

風葉の身のふしぎにながらへ。草露の命のまれにけふまでもたもち侍りて。ふたゝび尊容を拝し奉らん事。命は法のたからならずや。南無大慈大悲観世音ととなへて。まだしのゝめのあけはてぬ霞とともにたちいつる。六角の追出しの鐘誓願寺の花の外にひゞけば。亭犬は夜番の行燈の影にかしらをかたふけ。暁鶏しきりに声をみだす三条の中嶋を過れば。長橋の浪にひゞきをそふる鈴の音。ざんぎさんげ何やら童子冨士せんげんととなふる行者の声。暁の風にさそはれ。燈明かすかに見えて残月影さびし。独歩の道ははかもゆかず。又心ぼそきものにしあめれば。あはれ（2ウ）

挿絵（3オ）三条橋

ものいひ伽もがなとおもふに。まことや禅林ちかきわたりに。ふるくよりあひしれる聖のいます。久しくをとづれもたえ侍れど。たちよりてそゝのかしてや見ん。とはおもへども法のつとめの御所作を障んも。罪ふかきわざにしあめれば。おもひいでたるばかりにて。つえをたよりの道しばの。露をかなしひ霞をあはれひてゆけば。半町ばかりへだてゝ。火なはのにほひ東風にきこえて。屠所のひつじいまいくばくの無常のみちをあゆみ。閻魔のつかひ。いつのときか朽宅の窓にのぞまんと。たからかに誦じて仏号をとなふ聲せり。あはれにたつとくきもにそみておぼえければ。いかなる（3ウ）人ならんと。足はやに追つき見れば。としのほど五十あまりの僧。これも往詣のこゝろざしとみえて。檜笠の露おもげに。わらぐつをふんてしもくづえにすがれり。あはれよきみちづれこそ出来たれ。卒爾には侍れどもこと葉をかけてかたらはんとおもひ。いづくよりのお参りぞや。ひとり旅人つれ〴〵なるに。御同道申さんといふ。うれしくものたまひけるかな。我は西寺町壬生ちかき辺に庵をしめて侍る者なり。そこにはいかにとあれば。やつがれかりのすみかは。ひんかしの京。むかし大納言公任卿の家のほとりちかき所也。智恩院へ御参詣のをりふし。御尋ねにあづからんと。かたみに（4オ）ちぎりてたどりゆく。青蓮院の御所の前過る。この所に。見ざる。きかざる。いはざるのまします。逆縁なりともたちより。ついでがてら院家の桜も見まほしけれど。いまだ夜も明はなれねば。門守鎖に手かくるをとなひもせず。いびきまじりに打しはぶく声かつ〴〵聞ゆれば。ながめやりたるばかりにてむなしく過る所に。僧の云。噫わがこゝろよ。此三申にならはゞ。現世後生きはめて楽ひなるべき物を。うらちがひなるこなたの心にてこそといへる。我心に尤と驚かれ侍れば。まことにさにこそ候へとうなづく。よく思案して見給へ。われも人も覚えのある事にて侍るぞとよ。心にしたがふ色を見ては。春の柳眼にみだれ逆ふ詞を（4ウ）聞ては空にしられぬ雪まつ毛を埋む。かの竹林にすみし人は賢才のほまれも有しぞかし。又我ためにめいぼくある事。それにくはへて名聞にふけり。利養を得べき仕合ある時。そらしんしやくは度々なれど。笑の唇花かうばし。かの六宮粉黛顔色なかりし人は。絵にもうつされ詩哥文章のたねをまき。後生のいましめにもなれり。いとまばゆくこそ侍れ。然て後人のこゝろたのみかたく。不定とこゝろえぬるのみ。まことにてたがはぬ世なれば。憂喜手のうらをかへすがごとく。一毛のたがひめを見て。百舌のそしりを得るとき。室のやしまはむねにあらはれ。つるぎの

山は舌にとがる。嗟夫衛弥子瑕が桃の実の口あたりよき（5オ）まじはりとても。あまり寵々しきは。終りいかゞあらんとぞおぼゆる。其恨み我身つめりて忍びがたくは。人もかくこそいたましからめと。おもひやりも有て。口をとづるかと思へば。他人の誉れ有得のうはさをきくとき。前後の分別もなく。鼻の程おこめきて。よそめはづかしきまで人を訕る。其こゝろねなに事ぞや。利を貧りて我をたてん為也。嗚呼人生いくばくの程ぞ夢幻のさかい。水の泡にことならず。一息断絶のときは。何のたくはへか身にしたがはん。只用にたつものとては。間遠にをれる太布一端丼に。そさうなずゝ一れんのみ。さて此うへの因によつて果を感ずるとき。紫雲窓にそびき。異香室に（5ウ）みち〳〵て。心よき香を聞ん事も。又おそろしきいきほひの。赤鬼。しろ鬼。青鬼など。虎のかはの尻あてに。熊の毛のきやはんしめて。焔の車さしよせて。轅をたゝいてしもとをふり。なさけなき躰を見ん事も。それは面々の心に有て。更に他人のしるべきにあらず。下足には何わざつとめ給ふ。禅門やらんもしり侍らねど。おほかたは我慢にこそおはすらめといへるに。身桂もとより汗いで額あつかりければ。けあけの水を顔にそゝきて。日の岡にかゝれば。夜はほんのりと明はなれぬ

見るもうしきけばきのどくしかりとて

くちふたぎてもすまぬ世の中（6オ）

峠に茅屋あり。竹を焼茶を煮て。ゆきゝの人をとゞむ。にへばなささそふ松の風。のまぬ花香に目をさます。いかにお僧途中の長ばなしに。さこそ口中かはき。舌根もたゆくやあらん。先一ふくとさしいだす。よくこそ気のつき給ひたれ。さても風味や。これはおかゝの手茶にてやあるらん。あはれ都ちかくはより〳〵御斎のかへさにたづねん物をなどたはふれて。数服こゝろよくすゝる。茶は能悶を散ずれども。功をなすこと浅しとは。正真の酒ずきやいひをきけん。こちとづれの盃の雫にさへ。むねはとき〳〵めはちろ〳〵するよはものは。玉川子の方人をこそせめと打笑ひて。腰かけをたちのくとて（6ウ）

挿絵（7オ）ひの岡

世の中や茶屋のしやうぎに春の夢

野径の露もすそをうるほしわらぐつやゝしめれり。此所には天智天皇の御陵おはしますを御存知かと。まことにさ承りをよびたり。お僧は又きどくにしらせられたるといへば。さればとよ此比石山の案内者といふ物を板行して世間流布いたし侍る。それを見てしつたがほなり。いまだ見給はずやとて血脉袋よりとり出せり。まことに道すぢ所づけ。ねんごろにかきしるせり。これを見てからは。三歳の嬰児も迷子にはなるまじ。天晴太鼓かねのいらぬやうに。たんれんしたる物かなと。よしなしごとをいひちらし。草のわか葉につえをとゞむ（7ウ）

すいさんやあんないなしに花の風

事のついでなるは本意をそむき候へども。又わざ〳〵は参りがたし。いざ此たよりに御庶を拝ん。尤しかるべしとて岡山のもとに至る。此帝御馬にめされて。山科のさとに行幸ありて。つゐに還御なかりき。御履をとゞめ給ひし所に。御陵をたてけると。水鏡といふ書にみえたり。歌にやましなの鏡の山と詠るは此御庶の事なりとぞ。僧念珠をしもみ拍子

木うちて。願弟子等といふより。念仏衆生摂取不捨と音声さはやかに。一せめ責てねんぶつする。予はそのうしろにひざをかゞめ。額を土になげつけて。しばらく礼し奉る。生者必滅会者定離のならひ（8オ）とは申ながら。うたてかなしき浮世かな。四海の安危は掌の内にてらし月卿囲繞のかしらをたれ。雲客渇仰の袖を合す。豈図。竹の台に千秋をちぎり。姑射山の松に萬春をたのみ。万乗のあるじといつかれさせ給ひしとき。かゝる辺鄙の苔の下。つばなまじりのすみれ草。げゞななの花の草の陰に玉躰をとゞめ奉らんとは。是故に経の偈にいはく。妻子珎寶も及王の位も。命終時に臨ては。随はざる者なり。唯戒と。及施と不放逸のみ。今世後世伴侶となる。まことなるかな。ひとり生れ独り死し。ひとり去独り来いずれの弁舌利口の人か。此ことはりをさなしといはん誰か聖者をもどきだてせん（8ウ）

挿絵（9オ）御べう野

あきの田のかりほの庵のまいちばい

つゆにぬれつゝ御びょう野のみち

京はみな落花したれど。あしびきの山のさくらはまだ最中にて。霞のたゝずまひもおもしろおかしひ松の木がくれに。一宇の御堂見えたり。とへば安祥寺とこたふ。摩尼峯の雲真如の月を吐。風一味の雨をつたへてそのあかつきの露をむすぶ。弘法大師の弟子真雅僧正開基にして。五条后順子御こんりうなり。文徳天皇の女御たかきこ。かくれさせ給ひて。そのお仏事おこなはせ給ふとき。山のみなうつりてけふにあふ事はとなりひらよまれし此寺にての事なれば。どうやら昔の（9ウ）忍ばれて無理にたちよらまほしく有けれど。御僧の口のにぶかりければ。下向の事にせよかしとおもひて。発句さえさゝげものせで。とをり一へんのいそがしぶり。後にかしらをかくにてぞあらんいにて貴様をかこちこそせめと。つぶやきながらさきへすゝむ。山外に山あつて眺望まなこをまどはし。道中景おほくして行人足をそし。をそいも道理。牛馬をよければ又駕籠かき。はい〳〵と云こゑものせはしなし。天は花に地は人に酔をりなるべし。やうやく山科の石橋を踏で。はるかに山岳をのぞめば。半は雲にやねばかり見えて。霞に峙つ仏閣あり。海道より行程七八町もあらんか。左右になみ（10オ）木の桜をうへたり。をりふし開落枝をまじへ。高低千顆の玉をつらね。其香濃かなる事。妓鑪のけふりをなんともおもはぬ風情。因にいはゞ。毛嬙も扇をかざし。西施も袖を面に掩はん。しかのみならず。花のちるをおし。みて天照太神にいのり給ひし中納言殿も。草の陰にてねたませ給ふらんとぞ覚ゆる。かの四町をしめし殿作りの。ひつじさるの方。いぬゐの御つほねに住せ給ひしおほんかた〳〵に。其世にしもあらましかば。御車をたてさせまして。我ををらせ申さん物をと。よしなき心をうごかす処にお寺さふらひとみえて。杉重にたて文そへてもたせたるが。となたへの御使者にゆかるゝやらん。手をふりめをいからし。いき〳〵とし（10ウ）て出来たる。やらよい便りかなと。これ〳〵お侍。これは何と申す御寺ぞと。のつしりと問かけたれば。にがみのはしつたる顔のつり鬚をしなで。子細らしげにこたへていはく。毘沙門御門主の居をしめ給ふ地なり。武州うへ野より。寛文年中に此所にうつさせ給ふ。霊験殊勝の多門天なり。御福など望みならば

いのり給へ。何時なりともやすい事。我は京へなんまかるといひ捨て去しが。半町ばかりゆきてくるりとたちもどり。なふ〳〵各。大事のことをいひおとした。此所には。片岡氏のなにがしとて。弓の名人居住なり千にひとつも花に手懸て。けがばしまつり給ふな。別の事ではをりないとて。につこと笑ひてのかれけり。さて〳〵見かけとちがふて。気（11オ）だてのよい男かな。ものゝ役にたゝう人じやと。せんど褒美してあゆみゆく。びしやもんだうの花ざかり。四王天の栄花もこれにはいかでまさるべき。何と御坊鼓に手をうちさうな所にてはなきかといふ。せめ念仏のかね。伽陀をはじむるりんもよからんとて。笑ひ〳〵梢をながめしば〳〵賞心をうごかすのみ。これ程の美景。一分自慢の京にさへ。あまた所は見え侍らぬに。何とて所の人々は。見のがしにして過せるぞや。花のおもはん事も恥かし無下にあさましくこそ覚え侍れ。崑山のふもとには。玉をもて鳥を抵彭蠡の濱には。魚をもて犬に食といへる。こゝの類ひにや侍らん。さあまた山風の。なにの用捨もなく。我物いらずにちらしければ。僧たからかに（11ウ）

挿絵（12オ）びしやもんたう

かうもいはれうかとて

花の風は無常もしるを在所衆

そこにも何ぞあらんといはれて。いやともさすがいはれねば。しばし御堂のかたを見やりて

おもちやうのほこ何のため花の風

足の乗物せりつけてゆけば。石の鳥居たちたり。額を見れば諸羽大明神とうたれて侍り。僧阿字観をこらすといひて。めをふたぎ面をしかめたつたり居たり。其さまいとむつかし。此御神は天児屋命。一座。太王命。一座にておはします。二神高皇産霊尊の詔をもて。天孫左右羽翼の臣とす。故に両羽と号。両字あらためて。今は諸の字にかき侍る。社は一町余おくの（12ウ）かた木ふかき陰にたち給へると所の人申す。和光同塵の結縁。示現利生の垂迹宮司のなにがし殿にたづねまほしけれど。さきへ心のすゝむにひかれて。鳥居のもとより再拝して過る

えてしがなもろはぶたへをちはやふる

神のみけしとたてまつらなん

参宮の道者その外関東上下の人々。それにくはへて石山まいり。石で怪我すな。しづかに〳〵と手をひき腰をおさるゝおばゝたち。まだ此ごろの法躰と見えて。月代の跡あたらしいそりたてのお禅門。孫を愛し子をあせらかして。こゝは誰をか松坂や。四の宮川原四の辻と。をりべにいくつほどの機嫌ぞや。しもく杖（13オ）をかたげちよこ〳〵走りしてこれなるはじふぜんじ六地蔵。さてこれなる石塔をよく見てをけ。わぬしの寺にてならふ百人一首の中に。これやこのゆくもかへるもわかれて。はとよむ哥の作者。せみ丸の御塚なるぞ。かへりてお師匠にかたれ。茶はのみたうないか。小坊主よきせる筒おとしおるなと。にこやかにいへるを聞て。僧のいはるゝ事は。四恩の中には。父母の恩いたりてふかし。蘇迷盧の山。蒼溟海も。たとへとするにたらずとはいはれたるをや。胎内にやどりて二百余日。母の身をくるしめ。生れいてゝは懐にあそびて。数かぎりなき乳味をつゐやし。夜もすがらむすぶともなき

手枕の。夢のうきはし霜さえて。かたしく袖は（13ウ）うす氷。とふのすがこも七ふには。子どもねさせて埋火の。うづもれてのみ消ぬべき。身はさよ嵐ふきとをし。手足こゞへてくるしきをも。歯をくいしばり堪忍ぶ。しのぶもぢずり子ゆへぞと。おもひみだるゝ烏羽玉の。髪とりあぐるいとまさへ。浪にもゆるさはべのほたる。ほそこゑに名のる枕蚊屋に。乳ぶさふくめてそひ臥の。とこなつといふ花の。なでしこの名もむつまじく。ちりをだにすへじとおもふすろ箒の。手まめにきよめ侍る。南面のはしゐちかく簾かゝげて。青畳しきつめたる夏ざしきをぬらし。ねおきのわるさどろをふめば。先いだきとる袖の露。ぬれたる所に我は臥。かはける莚にぬりうちはとりて。涼風招（14オ）ゆふぐれの。軒端の松によせて。寿命長遠かみかたかれとかしらをなでゝ。しらぬゆくすゑの事を。とやあらんかくやあらましと。案じをきに心をつゐやし。やうやく成長にしたがひ。いろはにほへとのもじをかぞへ。筆をにぎりてにじり書を。世にないことのやうにおもひ。笑をふくみてほめそやせば。おさな心のうたてさは。杉さうじを墨ぬりにし。唐紙にあなをあくる。慈父怒りて折檻の枝をとれば。いかで見捨てあらん。悲母の袖に子をかくし。諫のつえをいたはれり。吁此厚恩いかゞせん。雪中の筍。氷に魚のをどる程の。こゝろざしはなくともまゝよ。せめてたらちねのこゝろをやすめ。しかふして。孝弟はそれ仁をおこなふのもとかと。よき（14ウ）人ののたまひし事を。馬耳風にせずもあらまほしとて。墨のたもとにうろ〳〵なみだをおとされし。尤とはおぼえしかども。たしなみ得つべきこなたにあらねば。我身ながらもあさましくぞ侍る

めがくれてさぐりあしなる人のおやの
子をおもふみちにちようちんもがな

かゝりける所に。追分によりふし見へのわかれ道ある辺にて。けんくは仕出したるとみえて。もや〳〵と人さはぐ。やあら便宜あしゝとおもひ。お僧も我も。ものにかまはぬ木陰にたちより。ことの子細をきけば。一方には。十九二十ばかりなる女。十人なみこえたるが。蛾眉を點ぜる容貌白雲を帯。唇夕陽の影をうつす。（15オ）せみのつばさを画て両鬢を理ふ。その暐曄なる面子は。やうきひのさくらのあけぼのゝ露を帯たるかとうたがひ。婀娜なる腰つきは。昭君村のやなぎの。夕風にみだるゝかとあやまつ。かいりうわうのきさきにしても。恥かしからぬ女なり。衣はもろこしぶねの便につけて。はる〴〵の海をわたり。いくへの波かたゝみつらん。りんずちりめんの類ひを。紅藍に湿して金糸をまじへ。しろがねのすりはく光色こまやかなり。翠麝のかけ香は百花をまねいて袖の外にあまる。かゝる美艶のすがたしたる人を具したる男。三十ばかりにや見ゆらん。二合半もけがすと見えて。二腰さしてかきのはちまきむずとしめ。いとかひ〴〵しき（15ウ）ありさまなり。相手はこれもはたちあまり。三十に成ならざるの若者三人。町人と見えながら。陽気一片の大わきざし。又は大小さしたるもあり。みな〳〵をとらぬ血之助にや。此女房をめにかけて。あとになりさきになり。手さゝぬばかりたはふるゝ。礼記といふ書にも。男女親ら授ずとて。男と女は。直にものを手わたしするをさへ。いましめとし侍れば。ひとりある

女なりとて。不義のふるまひすべき事かは。まいて目付のをのこあり。きりやうこつがらまなこざし。たゞ者とも見えざるが。つきそひたるを存知ながら。それをそれとも思はぬは。どうぼねよしの我身しらず後のわざはひをわきまへず。つれのおほきをかさに（16オ）きて。きかれぬことは舌をふるふ。女をつれたる男。神妙なるものと見えて。一度も二度も虫をしなし。きかぬ白にて過ゆけば。いよ〳〵血之助かつに乗。よのつねのこしぬけなどあひしらふやうに詞をあらす。あはやなんぎにをよびなん。あしもとのあかい時道をよぎよかしと。そばからさへ笑止に心ある人はおもひあへるに。身のうへの非をかへりみなき。無分別者こそうたてけれ。かの侍。己を克て礼に復。もどかしきまで忍びけるが。こらへぶくろやきれたりけん。だるまをもどく眼つき。三人をはたとにらみ。いかにをの〳〵。最前よりの途中の無礼。身どもしらぬと思はるゝか。始終いち〳〵忍びがたし。されともけふの旅（16ウ）ころもうらみぬにてはあらねども。あふさか山のやま嵐さはぎあせたる人々の。うき名をよそにたつの市や。いさまだしらぬ諸人に面まほられんロ惜さ。第一仏の御照覧を恥。または主君のてまへといひ。とかくひかるゝうしろ髪むすぼゝれたる我心。はづかしながらおもひときて。うしろゆびさゝるゝまで。人のおもはくもかへりみす。こらへがたきを忍ひたり。さこそなんぢらおもふらん。某さいたるこしの物。寺町作りか油小路。さてはいにしへ刑部卿忠盛。やみうちの難をのがれんための。智略につくりし太刀などのやうに。こなして後悔し給ふな。自讃ははらのかはなれど。ゆきひらといふかなたくみ。三年精進潔斎（17オ）して。うちいだしたるかたななり。親重代の銘の物。こしをはなたず帯したり我いふところ偽らず。さえたるかねあぢたゞいま見せん。虎口のそれがし亀毛の命。たのむところはゆきひらなり。虫同前の人々に。あたら刃をけがさん事。無念には存ずれども。一人ものがすまじ。さだめてをの〳〵口も口手も手にて候べし。そこをひくなと詞をかはし。女は茶屋に忍ばせて。きたる菅がさぬいですて。かたなの柄に手をかくる。その強盛の勢ひは。金剛力士のいかれるがごとし。すはや小事が大事になるよ。愛宕の太郎。くらまの僧正。ひらのゝ次郎。伊都奈の三郎殿の。めさましこそ出来たとれ。かたづを呑で見ゐたる（17ウ）

挿絵（18オ）追わけ

所に。其辺の茶屋のとゝ。在所の名主百姓ども。より捧くはのえをつとり〳〵。草かりがまをひらめかし狼藉めされ候なと。数十人とりまはす。かの三人の者共陽気にはみえしかども。町人のあさましさは。若士に気色うばゝれ。はじめの口はいづちゆきけん。忽いろ変じて。面に野べのみどりをうつし。眼に山雨をうかへ。一言の返答にもをよばず。わらを出したるていたらく。見ぐるしかりけるありさまなり。智者は惑はず。勇者はおそれずとはいはれたるをやをりふしその日の日和やよひ一番の天気にて。京衆田舎衆うちうつしたる大参り。ふたへ三重にたちかこみて。くち〳〵にのゝしるほどに。ものゝわけもきこえず。（18ウ）人馬のほこり衣をけがし。まなこをいたましめければ。しかじたちのかんにはとおもひて。跡を見かへり〳〵てゆく。あつかひにやなりけん。又ぬいて見しらせたるか。心もとなく侍し。とかく出過たわかい衆の。

よいちりげとぞおぼえ侍る

いさかひのもとでとなれるたはれ妻

なん百りやうがものゝあるらん

職人のきをならべ。針するをと耳にとがる所を問ば大谷といふ。いけのかはのなにがしくれがしと名乗て。関東関西にかくれなき。名物のはりめせなど。舞錐のもみあひて威勢をあらそひ。我をとらじと店をかざる。となりをきけば香具所や。みたけさう（19オ）じのねり薬。たうらい導師の御つげにて。調合の名方薬器の残香をなめたる雞犬までも。畢卒宮の雲にかけり。五十七倶胝六十百千歳のよはひをたもつ功能あり。かの蓬が嶋のいく薬とやらんは。人力にてはもとめがたきに。幸ひなるかな都ちかき。あふさかやまの木下にかゝる霊薬ありける事よ。暾阪らじ舟中に老なんといひし。秦の徐福よのこりおほしといへば。僧いひけらく。薬屋どの。其時分はこゝには居給ふまじければ。しらざりけるもことはりにこそ。其ほか種々の薬種かずをつくせる中に。当所の如来夢想膏。もろ〳〵の腫物をいやすのみにあらす。貧瞋痴の三毒をけし東方（19ウ）

挿絵（20オ）はしり井

るりの雲の上まで。すいあぐるほどの薬力あり。又走井の。水をのづから春薬方を。練嚢の露を承て。ねりいだしたる仙人丸。君臣佐使をわきまへたりと。ゐげんのたら〳〵聞事かなと。ほめぬ人こそなかりけれ

はしり井や養老のながれ花と薬

さくら花ゆめかうつゝかきのふと過。けふもむなしく暮なんとす。すゑの露もとのしづくの世にしあれば。あすのうき身はたのみがたし。まいてこよひの命をや。山はあふさかの名をえたれども。我は再会を期しがたければ。一しほ花になごりおしく。うぐひすの声心ぼそき。杉の下道ふみならし（20ウ）関の宮居にまうでけり。此神はむかしのせみ丸の。わら屋のあとをうしなはずして。そこに神となりてすみ給ふなるべし。いまも打過るたよりに見れば。昔ふかくさのみかどの御使にて。和琴ならひに。良峯宗貞良少将とてかよひけんほどのことまで。面影にうかひていみじくこそ侍れ。と無名抄にかけり。道人といひ。歌人にておはするよし承り侍れば。たむけぐさ一枝。おづ〳〵さゝげて足ばやに過る。

うたの徳しるもしらぬもあふさかの

せきのみやうじんおがまぬはなし

せきの清水といふは。関寺より西へ二三町ばかりゆきて。みちよりきたのつらに、少たちあがれる（21オ）所に一丈ばかりなる石のたうあり。其塔のひんがしへ三段ばかり至りて。くぼめるところは。すなはちむかしの関のしみづの跡なりと。長明筆をのこされし。いまの清水其所かもしりがたし。又例のやまおろしのかぜ。花をもてきて清水をくもらしければ

香によつて

こほりとけたり

水のはな（21ウ）

石山寺いりあひの鐘　音

せきでらうち過て大津の八町にかゝる。旅店の烟にぎやかに。行客をとむるうかれめは。面に志賀の花をうつし。にほひは袖のかけ香にふくみ。音羽のもみぢはまへだれに秋のかたみをのこすかと見ゆ。さゞなみにさほさすわたし守がふなちんは。夢ばかりなる手枕に。渡海の労をいたづらになし。駅路の数歩のくるしひにかへたる駄賃は。君が一夜のなさけにつゐやし。銭ざしばかり腰にぶらり。見ずや。油つきの掃除むつかしきなつの虫。女のはける木履のきれより吹いだすこゑにまよひて。一命をふたつ玉にむなしく。からは鹿屋町の店にのこる。戦の場に（1オ）すゝんでは力量人にすぐれたる。よろひ武者のおそろしげなるをも。鼻のさきにてとつてほかす。勇猛強盛の獣も。をめ〳〵と髪すぢにつながるゝを。これみなひとつまどひによりてなり。とかく人は身をほろぼし家を棒にふらぬやうにあらまほしき事なり。最前をいわけにてのけんくはなども色欲のわざはひなれば。老たるもわかきも。おもひのきづなをしめゆるめして。いつぞはほどく分別せよと。古賢は申をかれたり

ものいふを出をんなと見よしがの花

ここにみゐでらのかたより。よはひ三五の影ふけて十六夜月にもねたまれ。花も面ふりさうなる若衆（1ウ）

挿絵（2オ）大津八町

うへしたしろ小袖。こしつきたをやかに着なし。はなかいらぎ金鍔かけたる大わきざし。忍びあみがさふか〳〵とかぶり。おなじ年ばひなる草履とりに。さくら一枝もたせて来る人あり。どなたの扈従ならんと笠の内ゆかしき所に。きぬもじの衣に。わげさうちかけたる法師四十あまりに見ゆるがゆきあひたり。若衆あみがさぬぎ色代して。なに事をかいはれしやらん。やゝしばらく袖をひかへらる。そのあいさつのしほらしさ。こぼれかゝる愛敬笑をふくめるかほばせは。芙蓉のあかつきのなみに浮ひて。露おもげなる風情。舜挙も筆力をうしなひつべきよそほひなり。ものがたりをはりて。たちわかれ（2ウ）たる袖の追風。種々おほきなかにも。ひかる源氏なつかしきにほひなりと。ことに心をうつさせ給ひし侍従のかほり。こなたの身にもうつるばかり。こゝろときめきせられ侍る。なをゆかんかたしらまほしくて。はるかに見をくりけれど。往還の人にまぎれて。いづこともなく影をうしなひぬると。下向の後ある人にかたりければ。それはかのけいかい律師のおもひにこがれし。梅若の幽霊にてぞあるらん。いつも花の此は。三井のさくらに執をのこして。うかれいづると聞侍し。たぶんそれにてこそあらめといへるに。おもひもさめておそろしかりし

見し人やもし児桜のはなのせい（3オ）

四宮殿に詣て。一心さいはいの謹啓なし奉る。此御神は。大。ひえ。をびえ。気此。小禅師。四座をあがめたてまつると。玉垣のちりうちはらひ。松のおち葉かく宮司のしもべ申侍る。さて〳〵きどくなものかな。かゝる事などしりさうなじんぶつかは。ほうさきまでよこばなにじり。袖によだれのふぜいして。こむさくるしいありさまよと。おもひこなさばてをやとらんと。えつぼにいりてみちをいそぐ。松もとゝいふと

ころより渡海のたよりを得て各あしをやすめ侍る。水たいらかに舟しづかなる海のをもては。藍ぞめの絹ひきはへたるやうに。とをめにかゝるみねの雲は。山びめのてをりをさらせるかと（3ウ）うたがふ。うきおけのなみにひかるゝをながめて僧のいひけらく。漁夫のあみを引く。身をたすけんとて身をくるしみ。遊魚のつりばりをのむ。命をおしみていのちをほろぼす。人いくばくの利をかえたる。魚いくばくの餌をかもとむる。世をわしる思ひ。いのちをたばふこゝろざし。かれもこれもとにおなじと。眉をひそめてなみだぐまれしかば。まことにさにこそ候ひけれ。かりのこの身をやしなはんとて。仏のいましめを無になし侍る事のあさましさよ。いざや此うろくずどものために念仏せんとて。よせてはかへるなみのをと。しがのうら風声そへて。六字の名号をとなへ。わずゞさら〳〵とをし（4オ）もまれければ。乗あひの人の中より誰やらん

もてあそぶ世中ぞうきあみ人に
つみつくらするふなをますかな

郵船かぜこゝろよく。旅客をの〳〵いさみあへり。老たるあり若きあり。男女袖うちはへて。よも山のはなしかまびすしく。人の毀誉みゝにとがる。たゞふなばたを枕して鼾かきたる人ぞ。つみなくてみえ侍る。其中にとしのほど四十あまりのおとこ。僧の右のわきにゐられけるが。墨のたもとをひきうこかし。なれ〳〵しき申事なれど。慮外はゆるさせ給へ。それがしは都一条辺に住はべる者なり。我らのしたしき者。このころのはやり煩ひになやま（4ウ）

挿絵（5オ）まつもと

され。前後もしらずくるしひければ。良医は申すにやをよぶ。よろづにまじなひ。かぢなとせさせ給へど。かつてそのしるしなければ。しんるいどもゝほうど草臥。きをうしなひちからをおとしてさふらふ。けふもその祈願のこゝろざしにて参詣申なり。お僧は仏経にまなこをさらさせ給へば。神力無極のすせうなる事ども。あまた御覧じつらんゆかしさよ。もし其中に。かやうの病患すくひ給ふべき法文あらばさづけ給へ。御つたへをうけて。苦痛をやめてとらせ。すこしなりとも正念にならしめ。仏の御影をおがませて。命をはらせたくこそと。ものやはらかにいんぎんなるあいさつなり。僧のいはく（5ウ）御愁歎ことはりなり。まことに仰らるゝごとくにこそ。先はとらの尾をふむこゝちして。卯かりし年のなごりいまだつきもやらで。三年にをよぶ飢饉の愁いづれの人かくるしまざる。商家には売買うとく。工人は手をむなしくして。あたら月日をむだ〳〵とくらす。そのをんづもりいかゞせん。金銀ともしからぬ人も。世間につれて心をくるしふ。ましてたくはへたる米穀もなくその日くらしのわび人は。日影まつ間の草の露あらしにむかふ燈のごとく。心ぼそさはいふはかりなし。其此銀一銭めをもて。わづかに米一升にかゆる。前代未聞の事なりと。老たる人は猶かなしふ。あはれなるかなわづかにもてる調度をうり。衣を代なし（6オ）など。あかはだかになり。こゝの長塀。かしこの辻にうかれて。木の葉くさのねに。露の命をかくるといへど。おほくはきえて路頭に臥。人の門戸にたちて袖をひろぐるかと見れば。すなはちたふれ死する者。いく千万といふ数をし

らず。況や河原などは。めもあてられぬありさまなり。まなこをうがつつばさ。かばねをあらそふけだものゝ声。山おろしの風。きしうつなみの音そへて。人のこゝろをいたましむ。なかんづく朝の霜に瘀み。夕の雨に洗はれて。肪脹爛壊のすがた。くさき香世間にみちて。おほふたもとにあまるばかり。あしふみたてん道もなし。殆無常の境。不定の世とはいひながら。うたてかりける事ども也。もはや（6ウ）これにてよいかとおもへば。疫癘といふくせものおこりて。諸民なげきかなしふこゑ。みゝにみちてはらわたをたつ。いたましきかなや。すそ野の塚は此ときにかずそひ。過去帳のおもては。いにし年にくろみすぎ。春をむかへて筆のたてどをうしなふ。そこの御物語をきくに。十死一生にして。たのみはすくなくかなしひはおほくこそ侍れ。たとひ夢中にておはするとも。なにとぞして仏像をおがませ。名号をみゝにふれたくこそ侍れとよ。我なましゐにに沙門のかたちをまなび。ほとけに帰する躰なれば。御こゝろにくきは尤なれども。三縁山の雪はおしまづきのさきにいまだつくねず。禅林のほたるは。見台の下（7オ）にあつめたる事侍らねば。一くはんの聖教としてまなこにあきらかならず。何をもてかぜひをわかん。しかりといへども。たふとき聖のつたへしことの。みゝのそこにあかなれて侍る事に。おもひあはされて。得心し給へる事のあめるを。船中のねふりさましにものがたり申侍らん。枕をそばだてたまへ。愚僧が存ぜし人。此病にて苦痛はなはだし。其方の御ものがたりにちがはず。みゝふたがり眼色かはり。舌すくみてものいふ事あたはず。くすしも茶匙をすてければ。もはやあちものにうちつけ。ちしごをくりなど。終をまつ。さるほどに日来よしみの出家を請じて。枕上にあみだの像をたてゝ。高声念仏数遍にをよぶ。しか（7ウ）るあいだ。漢月かげしづかにして。軒の松風ふけゆくかねのこゑに和し。のりすりをけと鳥のなく音もものすごく。世間ひつそりと。よろづものあはれ也。かんびやうの衆伽の人々も。おほかたねふりがちにものしけれど。聖はめに鈴をはり。鉦鼓うちならし。たゆみなく念仏して侍るに。ともしびの影よりみれば。あさましく痩おとろへ。日来こゝにありとも見えぬもの二人。病者のまくらもとをたちて。いまはかへらんこれまでぞとて。屏風をつたひ連子よりいでたり。聖ふしぎにおもひ。下部をおこし。しそくさして背戸を見するにさらに人なし。其時人々めをさまし。何事ぞといふ。聖くだんのありさまを（8オ）かたる皆人身の毛よだつておそれあへり。病などのいにけるにやといふ。はたしてそれより心よげにみえて。息のしたに仏号をとなへ。尊像を拝まんとす。一門の人々色をなをし。くすしのがりまかりてかくと告ければ。乗物をはやめてきたり。脉うかゞひていはく。よべは必定しぬべき人の。今朝の蘇生はふしぎなりと。右の薬にかげんしてあたへられしかば。いよいよ験気をえたり。ほんぶくの後。かのれんじより出ていにし。痩法師がことを尋ねければ。病床にふしたる日より。ひだりみぎりに付そひて。身を苦しめたる事いはんかたなかりけるに。をの〳〵念仏せられし夜より。二人のものどもかへるとぼえて。心（8ウ）すゞしくなりたるとかたられたり。たしかに此ごろの事なり。うきたる事にはあらず。これによそへて昔をおもふに。毘舎離国に。五種の悪病はやりて。人民くるしむ事かぎりなし。

其五種とは一にはまなこあかくして朱をさしたるごとく。二には両のみゝよりうみいづる。三にははなより血ながるゝ。四には舌すくみてものいふ事あたはず。五には食する所のもの化して麁渋となる。心身なふらんするありさま。酒にえひたる人のごとし。五の鬼あり面のくろき事墨をぬりたるごとし。五のまなこあり。まがれる牙上さまにいでたり。人の精気をすふ。良医の耆婆道術をつくせどもすくふ事あたはず。其此（9オ）月盖長者といふ者あり。かやうに人民のくるしひ侍る事をかなしみて。釈迦仏のみもとに詣て。恭敬礼拝して此苦をすくひ給へと。そのとき世尊。大慈悲をおこし給ひて。もろ〳〵の病者に告給はゝ。西方にあみだ仏。観世音。大せいしまします。なんぢらまさに五躰を地になげ香をたき花をちらし。一心不乱に十念名号を称ずべしと。こゝにをひてもろ〳〵の人民。をしへのごとく仏号をとなふ。其時三尊紫雲に乗じ一時に来らせ給ひて。光明をはなちて衆生を照し。観音の咒を説給ふに。一切の病苦皆こと〴〵く消滅して。もとのごとく平愈したりと。此。請観音経の説なり。うたがひ給ふべからずと。かたら（9ウ）れければ。かの男つく〴〵とちやうもんして。双眼になみだをうかへ。これ偏に石山の御本尊の御利生なるべし。はやく下向をとげ。御をしへのごとく称名念仏して。苦患をすくひ侍るべしとて。歓喜の心あさからず。船中きゝつたふるほどの人々も。信心をおこして。念仏のこゑともろともに。ふねは石山につきにけり。先になひ茶屋にたちよりて。わらぐつをぬぎ足をさすり。松根によつて腰をなづる。一盃の香煎にのんどのいきどをりははやくさんじ。畳巌を凌ぎし玉の汗は。朝鮮扇のすなごにかはく。はながみてのこいうらみがほなり。既にして仏閣を見たてまつれば。仏法興隆の砌九百余歳にをよび。千歳に近き星（10オ）漢。霜ふりたりといへども。楼殿玲瓏たるよそほひ。南方無垢の浄刹をうつし。三十三身の月影を。洞中清浅の水にやどす。軒の松のきの松。いくたびの開帳にかあひけん。老たる嵐は。衆生若聞名。離苦得解脱の音声をいたす。弘誓のふかきことは瀁々たる湖水のごとく。恵みをあまねく群生にうるほす。かるがゆへに。一切の功徳を具せる。慈悲の御まなこをもて。参詣の衆を視給ふ事は。たとへば日輪の山の端をいでゝ世間の闇を破るがごとし。縦然まるた舟のあやうく。山賊のくるしひあらん。此尊を念じ奉れば。波浪不能没。衆怨悉退散。巨益をこの山にえたりとす。若至こんがう神は門外に立て。大のまなこに怒を（10ウ）ふくみ。ならゑんのちからこぶ。利剣をにぎるかいなに出し。悪障をふせき。善業をまもりて大悲の弓の助となれり。もとより勝地の眺望。感腸しば〳〵うごきて愛心やみがたし。水は山影を銜み。浪の衣岩ほをなづ。峩々たる青巌の水は。まん〳〵たる碧浪の一掬をぬすみて。旧苔の鬚をあらひ。風は山祇の髪をけづる。花は暁月にむかひて面を理い。柳の緑まゆをつくる。誰謂松の嵐に高山流泉の曲をあやつりて。子期伯牙が爪音をのこすとは。誰かいひし。海はびはの名にしおへば。喩をかりて。もてよそへておもふに。風にみだるゝ花の露は。誰かきかへすならん。銀瓶われて水王盤に迸るかとうたがひ。山を染る（11オ）岩つゝじは一曲の紅絹。纏頭するかとあやまつ。然して。きしにつなげるふねに。さゞなみのよするをとは。潯陽の江のかたらひに似たり。時なるか

な〳〵。春の光融々として。天気爽かに。地形すぐれたるよそほひ。丹青の妙も筆をほかし。宏才の師も口をとぢん。ふもとに数舎の僧坊ならべり。霞ゆたかに。宗の法燈をかゝげ。九識の窓の前には。甘露の法雨をそゝき。印契に。金胎両部の露をむすび。三一諦円融の花をながめ。十乗の床のもとには。瑜伽の法水をたゝへて。即身成仏の月をすます。直ちに彼岸寂静の砌か。側に寶塔にならびて苔むしたる石塔あり。これぞかの為時の息女。源氏物語かきて。（11ウ）あめがしたに名高き賢女。日本紀のつぼねなどまでよばれし人の古墳ときけば。めぐりあひて見し女性にもあらず。雲がくれにし夜半の月の。ゆくゑもしらぬ御事なれど。なにとなくむかしおぼえてなみだがましかりければ。仏号をとなへて追善

世や蝶のゆめのうきはしなむあみだ

むなしきからは土中に埋むといへども。五十四帖のことのはや。湖水にうかふ月影の。名はあきらかにとゞまりて。いまゝでのこる筆の跡。たつ子いざる子しらぬはなし。まことに老比丘ふでをくはふると。法成寺殿おほせられしさもあらんかし。さても海山の眺望にふけり。又茶屋のとゝの。ものやはらかなる（12オ）気だてに時刻のうつるをもおぼえずして。仏前へをそなはり侍る事よ。いざお僧とて。茶店をたちのき。岩のかけみちふみならし。御堂にこそは参りけれ。しづかに礼拝し奉り僧の読経せらるゝほど。終りをまちて舞台のかたはら。人にかまはぬ所に。遠めつかひてたゝずみ侍れば。群集の人の中より。としの程三十ばかりのおのこ。予を見しれるさまにて。ほゝえみてむかへり。誰とは思ひ分ねど。ゑしやくして侍るに。かの人あいさつしていはく。それがしはそこもとの万句へ。たび〳〵出席いたす何氏のなにがしなり。見しり給はずやといへるに。思ひあたりてまことにこそ候ひけれ。夜陰の事な（12ウ）ればうと〳〵しくてといらへて。きせる筒火なはさしいだす。たばこより先当座を味ひて見ばやとのぞまれければ

殊にすきのしる人うれし山ざくら

と申ければ。そのまゝあいさつの脇をせられし

柳葉軒にあそぶうぐひす

さらばお僧第三あそばせ。いひ捨におもて八句つかふまつらんといへば。わるくてもくるしからずは申て見ん。後のわらひぐさにし給へとて

世上雪すだれに春のいろ見えて

対の六しやくひがしよりいたる

砂まくやあふひの御紋都入に（13オ）

よりあひはて明ゝぼのゝ月

あとしきのかねも音する秋の霜

きくははなの名煎薬はいさ

若き人のいはく。我えてかたのいはれやらん。はいかいほどおもしろきものは又なくあらじとおもへど。不数寄の人の前にては。塵をひねる事度々なり。あるとききらひの人のがりまかりしに。一せきにひとりある子を。さん〳〵折檻して畳をたゝかるゝ所へいたる。こは何事ぞや。便りあしき時見まひたる事かな。帰らばやと思ひけれど。つねにはなす友だちなれば。母屋の柱に手をかけて。けしからぬ御腹立かな。少々の事

は堪忍あれと。笑止がほにていひければ。おやぢきせる（13ウ）をとりなをし。いやとよそなた恨みあり。あのりちぎなる内気ものに。無用の事をすゝめられ。分に似あはぬ公儀だて。けふはかしこの月次なり。あすは誰とのしあひの会とて。夜はばら〳〵鳥の声をかぎり。昼は入あひのかねきくまで。外を家にしてうかれありけば。家業は日々におとろへゆく。さてたま〳〵宿にある日は。横ぎりの書物とりちらし。ひきわりの竹の筒の。むらさきがはにてとぢあはせたる中より。何やら巻物とりいだし。もの案じすがたにて。人のいふ事もきゝいれず。こゝろだて我慢になり。癈祭やみの下地なり。それがこうじて此ごろは、博奕女色のなかだちとす。和歌三神の御心に此等がかなひ侍るか（14オ）うつけが事はぜひもなし。足下には年もおとなしければ。日来ねんごろのしるしには。異見をくはへたまひてこそ。朋友の信にてあらめ。かゝる悪事を御存知ながら。おなじやうにをどりあひ。そゝのかし給事は。千万いこんに存ずる也おてまへのふできあらむを。身ども見のがしてをかるべきか。さりとてはおとなげなしと。ふるひこゑにていからるゝ。われら答て申すやう。御腹立きゝ分たり。老人ののたまふごとく。入魂の中なれば。いかで疎略に存ずべき。それゆへにこそはいかいも。より〳〵すゝめ申せしなり。され共それに事よせて。わる狂ひせよとのをしへは。毛吹草。はなひ草。御傘。いぬつくば等にも。かつて見えざる事（14ウ）なれば。努々しらぬ事ども。古老の事はおゐて論ぜず。いま此ときにいたりても。博奕遊女の宗匠なければ。門弟とてもあるべからず。あまりに物をいひ過給ふな。足下にも失はおはすべし。いつぞや三日三夜碁をうちあかされしとき。たばこの火にて羽織のかた袖はいになし。其余煙かいなにもえつき。消かねたりし事。それのみならず。菓子のいりまめにとりちがへて。くろ石かみわり。おく歯みなぬけたりしを。わすれ給ふかといひすてゝ帰りしが。さて〳〵めいわく。もとねにしかね侍るとかたられし。おかしかりけり。されば周茂叔は蓮を愛し。陶渕明はきくを好む。或は魚を盆山にいけてなぐさみ。あるは鶯の声を聞（15オ）ては。此俗―耳針―砭詩―腸鼓―吹なりなどいへり。すべて諸芸ともにその心の楽ひは好者にあらずしては。知ことかたくや侍らん。向後とても。さやうにしからるゝ人にあはせ給はゞ。此道の徳のたかき事。こゝにたとへていはゞ。東寺八坂の塔婆を。百千ばかりかさねあげても。それと思はぬほどのことを。ことはりてきかせ給へ。先はるのはじめの御よろこび。貴方にむかひて筆こゝろむるには。三蜃雲にうかへる嶋の薬子は。王母をして君に奉らしめんことをねがひ。霞に峙つ五城のかまへは。清凉紫震の宮殿にうつし。長生不死の術をもとめ。御代長久の言をなすにも。発句をいひてぞかきつけゝる。もとより郭公を待わび。はつ雪の朝（15ウ）暖簾をかゝげ。さうじをひらきて文台なをすはつねの事なればいふにをよばず。親を喪し子に死れて。玉ゆらの露もなみだもところせく。さゝ分し朝の袖のうへは。有明の月の影をのこし。またねの床のさむしろに。けふりとなりし俤を見はてぬ夢のさめざめと。打しめりたる人のもとへ。薄墨をもてとりあへず。おちからおとしなど。さつと筆をそめて。いたみの作かきつけたる。又なくあはれなる物にぞあめる。しかのみならず。ちはやふる宮ゐに。かけ奉る歌仙発句百

韵など。所願成就のしるしをあらはし。和光の影は雲紙のでい絵にかゝやき。結縁を参詣の塵にまじへ。つゐに真如の大海にうかふ。是以。和歌（16オ）といつは。発心説法の妙文といへり。乃ー若。わかき時のならひとて。女郎花のなまめきたてるをめでゝ。偕老をちぎらんことをたはふれ。かつら男の影を袖にやどしては。おなし苔の下にとかたらひ。塘の茶屋に夜をあかす。このときにあたつて。たらちねのおやのかうして。としてとたくはへをける。金をば塊のごとく。銀を礫のごとくにす。嗟手一ー人の悪心より。おほくの人の口をうごかすのみか。長老様までを頼み。説法のたら〳〵いさめをくはへらるれば。よしやくさ葉よ。かるかやの露とやきえん。又道心やおこさんなど。親の心をくるしむる人も。此道をすゝめぬれば。いつともなしにじちめになり。人にあひての当話よく。かたことをあらため。（16ウ）席ぶり見事な先輩の。句の出しぶりわがまゝならず。心だてうや〳〵しきに辱て。をのが座敷つき。畳ざはりのあらきをたしなみ。放埒のふるまひせじとおもひ衆人愛敬を専とす。より〳〵歌書のきれをものぞけば。四季転変のことはりをかんがへ。世上の無常をおもひしり。とがる心もかどをたをし。人にあらそふ心もうつし。さて恋の部をひらき見ては。うとくなる人を何とてうらむらんしられずしらぬをりもありしに。と西行法師のよまれし事や。またはみつねのことのはに。かれはてん後をばしらで夏草のふかくも人のおもほゆるかな。これらの心をさとりては。もとの悪性をくゐかなしひ。親に孝養の心出来（17オ）

挿絵（1817ウ 18オ）いしやま

朋友とまじはりて信あれば。もと異見せし人々も。恥入ほどの公界者になる。なんぞ誹諧の徳ならずや。宜哉。おとこ女の中をもはやらげ。たけきものゝふの心をもなぐさむると。貫之の筆の跡。たなごゝろをさすがごとしと。山鳥の尾に継尾したほど。春の日の二日がけくだをまきければ。わかき人何ともいはす。吐息をつき大あくびして。今少しやべり給はゞめがまひ侍らん。さて〳〵退屈したる事やと。そこなる塵を額につけて。しびり京へのぼれ〳〵。我もつれだち下向せんと互に一礼いひかはし。ひだりみぎりへわかれければ。日脚は昼にかたふきぬ。僧云。あひしれる宿坊あり。いざ給へ。かれゐひめさせんとのたまふ。いと時分こそよ（18ウ）けれとて。禅坊に入て休息し。伽藍の縁起など。粗たづね侍る。御本尊は御たけ一丈六尺のによいりん。ひだりに執金剛神。右にこんがう蔵王たゝせ給ふ。各御たけ八尺。良弁僧正開基なりときに人皇四十五代。聖武皇帝。とうだいじを御こんりう有て。十六ぢやうの釈迦仏の像をつくらせ給ふ。この時我朝に。いまだ黄金なかりき。みかど仰られけるは。和州金峯山は。その地みな黄金なりときく。弁師蔵王ぼさつにいのりて。金を得て仏像を荘厳し給へとなり。僧ちよくにしたがひ。よし野山に入て祈念せられけるに。蔵王権現ゆめのうちにつげてのたまはく。この山の黄金。はるかに慈尊の出世を侍て。竜花三（19オ）会のあかつきを期するがゆへに。あへてみづから恣にせずされば師の望みかなへがたし。こゝに江州勢田の辺にあたつて。一つの山あり。如意倫観自在霊応の地なり。なんぢかしこに至りて持念せば。かならず黄金を得んと宣ふと見て夢さめぬ。すなはちせたにおもむく。

時に白髪の老翁。大石の上に座して釣をたるゝあり。らうへん問ていはく。なんぢ何人ぞや答いはく。此山のあるじ此良明神なり。此所くはんをんの霊地なりといひ卒てゆきがたしらず。僧たつとくおぼえて。その石上にいほりをむすびて。によいりんの像を安置して読経持誦し給ふいくほどなく奥州よりはじめて黄金を奉る。みかどゑいかんあさからず

（19ウ）すなわち箔となして仏像を荘厳し給ふとそ。

すへらぎの御代さかへんとあづまなるみちのく山にこがね花さく。

家持和歌を奉られけるも。此ときの事なるべし。そのゝちみかど。らうべんと御心をひとつにして。当寺を御こんりうなされ。丈六の大悲者をきざみ給ふとき。先像をみくしに作りこめられけるなり。なをくはしき事はのちほど縁起よまるゝ事あるべし。御ちやうもん候へ。また色々の霊寶どもゝ侍るほどに。拝み給ひて下向めされよとあれば。一礼申。再会をちぎりてたちわかれぬ。すははやけふも。午の貝こそふきつなれ。ひつじのあゆみのちかづきぬるは。いかに御房といへば。こたへて（20オ）いひけらく。むまの貝ひつじのあゆみのちかづくを。しかと身におほえ給ふか。誰も舌の端にはかくれども。心にそむはまれならんかし。皆人の知がほにしてしらぬかなかならずしぬるならひ有とは。慈鎮和尚のいたみ給ひしもこゝにて侍るぞとよかるがゆへに経にいはく。一切の諸〳〵の世間に。生あるものは皆死に帰す寿命無量といへども。かならず終尽ることあり。夫さかんなるものは必おとろへあり。あひあふものはわかるゝこと。あり壮年ひさしく停らず。さかんなる色は病に侵され。命は死の為に呑る。法として常なるものある事なしと。此ことはりはつねにまなこにさへぎれども。名聞利養をあくまで貧り。常楽我浄の四倒におぼれて（20ウ）更におどろかぬなるべし。かなしきかなや秋の田の。ほのうへてらすいなづまの。ひかりのまよりあだなるいのち。花にさきだつあさがほの。露よりはかなき我も人も。きえての後のいかならん。ぼだいじゆの花ひらけねば。仏果のこのみむすぶ事なし。貪欲瞋恚愚癡にひかれて。地獄鬼畜にいたらん事。くちおしかるべきしだい也。此たびまれにうけたる。かけがへもなき人身をかならずむになし給ふなよ。愚僧づれの申事。さこそおかしとおぼすらめ。さりながら此ことは。紫衣を着せる師の。高座たゝいて。いきすぢをはらせ給ふ。口うつしを申侍る也。又西行の哥にも。うけがたき人のすがたにうかひいでゝこりずや唯もまたしづむべき。つねに（21オ）忘れず吟じて見たき哥には侍らずやと。しはがれ声になりていへる。尤とうなづき侍れど。口にあまき狂言綺語遊山翫水の噂。人事をきくやうにはなければ。眠半分のふぜいにて。しか〳〵耳にもいらざる。大悲の照覧こそ恥かしけれ。扨もけふの面会ふしぎにこそ。偏にぼさちの御引合なるべしといへば。僧も嬉しげに打笑。猶ゆく末を契給ひて。宿坊に逗留せらる。そこよりいとま申て帰ければ。入あひのかねの音すなりあすもやあらばきかむとすらん。と吟じてこそはやみにけれ。ときに延寶四年三月日市中借屋暗窓下にして記也

洛下冨尾似船

二條通武村新兵衛　開板

（21ウ）